
オリオンの足元に

金剛石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オリオンの足元に

【Nコード】

N2563Q

【作者名】

金剛石

【あらすじ】

自分の身の周りを見てみると、色々な奴がいる。面白い奴、リーダーシップのある奴、美人な奴、金持ちな奴、暗い奴、変な奴……それが社会。その社会の一角、殊に今の日本の子供達について記された「中日新聞 子供貧国」を参考に本作を執筆しました。事実を元にしたフィクションです。勿論、危ない奴が絡んできた事例は現実には無い……はずです。

(前書き)

男は道を歩いていった。真夜中の凍った外気に、自らの白い吐息が混じる。

音程の外れた、お世辞にも上手いとは言えない口笛を吹きつつ、古びた靴で雪を刻んだ。

朝が迫る空は、藍色の深みのある海のように、星は鏡のような水面を漂う海ほたるのように、何者にも干渉されず、ただ下界を見つめている。

男は、何やら薄汚い段ボール箱を抱え、凍った雪道に足を滑らせないよう注意深く歩いてくる。大切なものが入っているのか、なるべく箱を揺らさないように用心していた。

自分の長い灰色の髪が視界を遮ろうと垂れてくるので、男はいじくらしそうに首を振って髪を額の脇へ追いやる。

男は目的地につくと、箱の中身が雨風に晒されないように、小屋の軒下に寄せて置いた。

「ハッピーニューイヤー。若人よ、大志を抱け。お前達が届かない所にそれがあっても、跳ねれば届くこともある。空を見る、若者よ。あの巨人のオリオンが見えるか。跳べ、若者よ。あいつを超えて見せろ」

誰もいないその夜空に、男はそう語りかけた。

空には星が輝いている。そこには星の巨人が仁王立ちしていた。

寝言は寝て言えという言い回しがある。それと同じ。

夢は寝てから見るものだ。これも一つの格言だと思う。

起きている中で描くユメは、夢とは言わない。それはただの空想や妄想に過ぎない。

叶わないユメなんて無いと大言を吐く人間には分からないだろう。眠りに落ちてから見る夢なら、いくらでも願いを叶えることが可能だ。ただ、ユメは突きつけられた現実の前に儂く融ける、雪のひとかけらに過ぎない。

私にユメなど無い。ユメを見る余裕すら無い。むしろ、神様が私にユメを見る権利さえ与えてくれなかったのだ。

私は破り捨てた。まだ幼く純粹だった昔の私のユメを。いや、彼女はきつと自分とは違う人間なんだ。もともと、こんなユメなど私が憧れてはいなかった。憧れてはいけなかった。こんなものは、たわけたユメに違いないのだ。

わたしは、おとなになったら「かんごし」さんになりたいです。

真っ二つに引き裂いたその紙を、ぐしゃぐしゃに丸めてゴミ箱に放り込む。

ふと、明日は雪の芸術作品が公園に展示される祭日だということ思い出す。白銀の美しい氷が、人の手によって動物やキャラクターの形に彫刻されているのは、まさに夢のようだった。

いや、溶けていく氷の塊にユメを見るのは意味の無いことだ。自分にそう言い聞かせる。

そう、夢は寝てから見ろ。

m a i e

雪は降り積もり、街を白銀の世界に飾り付ける。正月が明け、中学校も三日前から始まった。

今日は朝っぱらから冷たい空気が屋外で待ち受けている。身を切るような寒さの中、暖かいコートをかき合わせ、荷物を手に提げて歩き出した。

小寒というだけあって、ここ数日のうちでも特に気温が低い。空は澄んだ青空が広がっているが、放射冷却のせいで地面がガチガチに凍りついている。下手をすれば滑って転倒するかもしれない。

毛糸の手袋を着けている手も、指先が寒さにやられて感覚が麻痺してきた。

いつも使っている細い通学路に入って行くこうとして、飛び込んできた光景に少したじろぐ。

薄暗く、^{ひんやり}人気があまりない通りで、薄汚れたクリーム色の服を来た人間がゴミを漁っていたのだ。誰かが賞味期限切れで捨てたプリンやパンを見つけては、着物のポケットに詰め込んでいく。食べ残しも然りだ。まるで、野良犬か何かを見ているようだった。

穴の空いたズボンの裾は、何かに引つ掛けたかのように裂けている。みすばらしい格好から、ホームレスだとすぐに分かった。暗いのでよく見えないが、どうやら中年を過ぎた男といった容だ。ボサボサの長い髪は、黒が薄れて灰色がかっている。

外見の不潔さから嫌悪感が湧き起こり、目を逸らした。この道を通るのをやめ、交通量の多い広い道を通って学校へ行くことにする。多少遠回りになるが、ゴミ漁りをしている男の隣をわざわざ横切りたいとは思わなかった。ナイフを隠し持った、追いつきかもしれない。

少年は、何事もなかったかのように細い小道を通り過ぎ、歩いていく。

そう言えば、明日は公園で雪の彫刻作品が展示される日だ。創作したアーティストやスポンサーが明かされていない、謎の祭典である。この街の、ちよつとした毎年恒例の行事だ。噂では、小学生が夜中に公園で製作しているとか言われていたが、実際のところは分からない。

明日の朝、公園へ行くのがが楽しみだ。

少年は少し愉快げな面持ちで、雪を踏みしめ去っていく。

class officer

クラスの会長は、朝の出欠確認を行っていた。

教室内をざつと見回し、人数を確認していく。ヤンキーじみた男二人が、気の弱い男子に絡んでいびついている。とある運動部の男子十名は固まって猥談をしていて、女子は二つの派閥に別れて高い声で騒いでいる。その輪に入っていない、本ばかり読んでいる女子が一人。あまり騒がない物静かな女子が三人固まって何か同じ紙に絵を描いている。冬休みの宿題の残りに追われる者が数人。机に伏せて寝ているのが三人。残りは暇そうに時間を持て余している。

四十人中、出席確認の時間までにクラスにいたのは三十八人。一

人はインフルエンザで休んでいると知っているのだが、もう一人はサボりか遅刻だろうと見当をつける。

その残った一人はヤンキーだ。来たい時に来て、帰りたい時に帰る。そういう、不良がこの学校には十数名いる。

案の定、その不良が来たのは朝のホームルームの最中だった。

クラスの担任が来年の高校受験について語る中、唐突に教室の扉がガラガラと開かれる。何食わぬ顔で入ってきたのは、髪を茶色に染めた女子。もちろん茶髪は校則違反だ。

話を切ったことを謝罪したのかしないのか、気だるそうに担任に小さく頭を下げ、どかっと自分の座席に腰かける。

担任は取り敢えず話を完結させ、ホームルームを終わらせる。そして、例の茶髪の不良を呼びつけた。

「職員室についてこい、みたいなことを言ってるぞ。ウチの担任が隣の席にいた男子が耳打ちしてくる。まあ、あの不良にとっては何度もあることだ。別に驚きもしなければ、興味があるわけでもない。何より、首を突っ込むことではない。」

クラスの会長は、そうやって今日も自分がいざこざに巻き込まれないよう、日和見して過ごす。

t e a c h e r

「なあ、俺の話をちゃんと聞いている?」

「うん、聞いている聞いている」

返ってくるのは、言葉とは裏腹の気の抜けた声。かれこれ三十分もこんな調子だ。

毎度のことながら、この少女には手を焼く。今日にしたって、冬休みが明けて三日が過ぎ、やっと登校してきたかと思えば髪が茶色になってる。

「なあ、十二月の給食費とホーム費、まだ持つてきてないよな？」

お母さんには話したのか？」

「だから言ったじゃない。一月分と一緒に払うから待って、って」

「六月の時も似たように答えて、結局、俺が親に会いに行くと言うまで払わなかつたらう」

「今回は大丈夫だって」

不貞不貞しく髪を撫で付けながら、こちらの視線から巧みに目を逸らしている。怒鳴りたいのを堪えつつも、糠に釘を打つような応酬ではさすがに気が持たない。

「もういい、来週の月曜の朝、話の続きをしよう」

続き、とは言っても、どうせ学校をサボって来ないつもりだ。今までに、数えきれないほど同じことが繰り返されてきた。もう結果は見えている。

少女の背中を見送りながら、担任は額に手を当てて深いため息をつく。

分からない。なぜ彼女がああいう態度で振る舞うのかが。

ふと、担任は携帯電話を取り出した。目的の人間の番号をコールする。ボランティアで学校のウサギの飼育係長をしてくれている人物だ。気が合い、何かと困った時、彼に相談していた。

大人だって愚痴をこぼす相手は必要だ。

職員室からヤンキーが戻ってきたのは、二時間目の数学が始まる直前だった。平然とした顔で、いつも連んでいる女子の派閥に愚痴を垂らし込んでいる。担任に対する露骨な悪口だ。

クラスの会長は見ても見ぬふりをしているし、早めにやって来た数学教師も困ったような表情を浮かべて黙っている。

授業の始まりを告げるチャイムが鳴ると、件の茶髪の女子は教師に話をつけ、教室を出ていった。

何やら腹痛だと言っていたが、サボるための口実に過ぎないのは目に見えて明らかだ。数学の教師としては、授業中にぺちやくちや喋る口の数が減って、ありがたいところだろうか。

juvenile delinquent

校舎裏、そこには数人の男女がたむろしていた。雪の積もった寒い中、身を寄せ合うようにしてタバコを吸ったり、談笑したりしている。

ヤンキーのたまり場だ。授業をサボって抜け出してきては、大概の者がそこに集まる。

パーマをかけた黒髪の少女は、その中に紛れていることに満足していた。普通の生徒のように授業を受けるのはつまらないし、喋っていれば先生が注意してくる。だから、授業中でも自由にいられる、うざい先生の目が届かないこの場所は居心地が良かった。

「あ、おっはよー」

タバコを吸っていた少年が、不意に誰かに手を振る。その視線の

先に、歩いてくる茶髪の少女がいた。

「また担任に呼び出し食らってさあ。ムカついてたから数学サボった」

悪びれた様子もない口調で、ここに来た理由をぶちまける。

そして、その少女は両手に提げていたスーパー袋をこれ見よがしに持ち上げた。

「また安売りして欲しい？」

彼女が怪しげな笑みを浮かべて訊ねる。みんなの返事はいつもの通りだ。

「マジで？」

「やったあ。貯金減ってきて困っててね」

仲間の嬉しそうな声が飛び交う。

少女も彼女の「安売り」を楽しみにしている一人だ。彼女の話によると、親戚のツテで衣服などを安く手に入れているとか。その恩恵を仲間達にも分けてくれるということだ。

袋の中にはマフラーや手袋を初め、冬物のグッズが揃っている。

目についた毛糸の手袋とロングマフラーを早速買った。市販の六七割程度の値段だ。

安売りが始まって十分ほど経った頃、突然新たな人間がやって来た。一瞬、先生かと身構えたが、よく見てみると馴染みのある人物だ。皆が肩の力を抜いたのが、雰囲気伝わってくる。

「よう、寒くねえのかお前ら？」

ニット帽を被り、着ていたジャージの上着を脇に抱えた男が歩いてきた。寒くないのか、と訊くその男自身も上半身は半袖ティーシャツという出で立ちだ。右手はコンビニの袋を持っている。

「おっさんは寒くないのかよ」

ヤンキーの少年が笑いながら問う。

「ああ。ウサギの飼育小屋の掃除終えて、ジョギングしてきたからな。暑い暑い」

おっさんと呼ばれたその男は、スーパー袋を少女達の前に置いた。

ごどん、という重たい音が幾つか聞こえる。

「ほら、どうせ寒い中授業サボってるんだろ？ 温かいの買ってき
たから飲めよ」

タオルで汗を拭って、男がジャージを着ながら言った。本当に暑
そうだ。

「うわあ、おっさんありがとう。でも今は授業じゃなくて自習の時
間なんだ」

おっさんが買ってきた熱い紅茶を一缶もらって、言った。おっさ
んはこちらを凝視した後、「嘘だろ」と答える。

「本当だって」

悪のりして、隣の男子が合わせてくる。

「まあ、どっちでもいいんだよ。動物に訊けば嘘か本当かすぐに分
かる」

「え？」

思わず、きよんとした顔でおっさんを見つめた。意味がいまい
ち分からない。

「動物つてのは嘘をつかない。あいつらは人間の嘘を敏感に察知で
きるんだ。だから、俺は騙せても、飼育小屋のウサギはちゃんと分
かってんのさ」

おっさんは肩をすくめて笑う。

「じゃ、俺は仕事が終わったから帰る。お前ら風邪引くなよ」

言うのが早いか、男はとっと歩き出した。

「バイバイ。おっさんも風邪に気をつけてね」

皆で手を振っておっさんを見送る。何だかんだで、おっさんは自
分達の面倒を看てくれていた。その点で、おっさんに親近感を抱い
ているのは少女だけではないはずだ。

男がいなくなつて、誰かが「動物つて嘘分かんのかなあ」としみ
じみ呟くのが小さく校舎の狭間に響いた。

しばらくの間、茶髪の少女は集まったお金を集計していた。その作業を終え、彼女は何も言わずに去ろうとする。

「どうしたの？」

声をかけてみると、保健室で寝てくる、という返事が返ってきた。そう言えば、眠そうというかやつれた表情をしていた気がしなくもない。

いつの間にか、茶髪の少女は姿を消していた。

黒髪のパーマの少女は再び仲間との世間話に加わり、自由なひとときを過ごす。

紅茶が暖かくて、美味しかった。

health nurse

茶髪の少女が怪我をしたわけでもなく保健室にやって来るのは、よくあることだった。

「美味しそうな紅茶飲んでるね」

話しかけると、笑顔で頷いて見せた。だが、どこか疲れが滲んでいる、引きつった微笑みだ。

「飼育係の人に貰った。あの人優しいよね。いつつもニット帽被って仏頂面してるから、初めて会った時は怖かったけど」

少女は酔っ払いのようにふらふらとソファに倒れ込む。よほど眠たいのだろうか。足元が覚束ない。

大抵、彼女が保健室で睡眠を取る時はもう数人仲間を連れてくる。そのせいで、校長から「保健室が不良のたまり場になっている」と注意を受けたこともあった。ところが、珍しく今日は彼女一人だ。

ベッドが空いているから、そちらを使えと促そうとして、硬直した。驚いて、目が釘付けになった。

彼女が幼い子供のように身体を丸め、すすり泣いていた。頬を、透明な雫が滑っていく。

「ごめんね、先生」

弱々しい震える声で囁く彼女は、普段の凶々しい自己中なヤンキーからはかけ離れていた。固まっている訳にもいかず、彼女の近くにそつと腰掛ける。少女は何も訊ねずとも語り出した。泣きながら、少女は自分の生活について吐露していく。

彼女の家は母子家庭だった。ただ一人の娘を、母は女手一つで育てている。ところが、彼女が中学校に上がったから、母親は急に子供に強く当たりだしたのだ。

中学校は小学校などと比べて、かかる費用が高い。修学旅行のためのお金も毎月少しずつ回収される。母親は二つ仕事を掛け持ち、空いている時間は内職をしていた。それでも月収は二十万に届かない。生活はますます苦しくなり、母親はストレスから酒に溺れるようになってしまった。

中学一年の夏頃から、少女は働き始めた。お金を稼がなければ、母親に家に入れてもらえなかったのだ。稼いだ給料はすべて母親に徴収されるので、自分が自由に使う金を得るために、万引きした衣服などを友達に安く売り込んでいた。

家庭の事情を仲間知られば、きつと引かれるだろう。だから、誰にも働いていることは明かしていなかった。

クラスの担任や校長にも、分かってもらえないだろうと考え、言わなかったらしい。

少女は仕事に明け暮れ、学校で勉強をするどころではなかった。眠らなければ、働くことはできない。学校の授業からは、あつという間に置いていかれた。授業時間は、睡眠時間だ。

そして昨晚、バイト先からクビにされた。泣いて頼み込んだが、電話は容赦なく切られた。親のツテで、唯一彼女を受け入れてくれ

た場所だった。

保健師は、泣き疲れてソファで眠り込んだ茶髪の少女に暖かい毛布を被せる。家のベッドではなく、保健室の固いソファで安らかな眠りに就いている彼女が、反^{かえ}って悲しかった。

中身の無い、冷たくなった紅茶の缶が床に置かれている。

f e m a l e

下校時刻を大きく過ぎて、茶髪の少女は学校を出た。仕事クビになったので、急いで家に帰る必要もない。

「辛くなったらまたおいで」

保健室の先生がそう言ってくれたのが、とても嬉しかった。思えば、自分が安心できる場所と言えば、保健室と仲間達がいる校舎裏しか無い気がする。

夜の冷え込みで、積もった雪がバリバリに固まっていた。ブーツが雪を踏むたび、バリツという軽快な音が夜の小道にこだまする。空は黒い帳^{とばし}に輝く宝石を散りばめ、瞬く星々は無音の囁きを風に乘せて唄っていた。

ふと、暗闇に蠢^{うご}く影が目に残る。よく観察してみると、資源ゴミのボックスを漁っている薄汚い男だった。灰色の長髪を振り乱し、夢中で何かをかき集めている。

そう言えば、クラスの中でも、最近ゴミを漁り歩いているホームレスのことが話題に上っていた。

みすばらしく惨めなその姿は、貧困に喘ぐ自分と重なって見える。目を背け、再び家路に就いた。しばらく俯き加減に歩いていると、前方から誰かがやって来る足音がした。

顔を上げると、黒いサングラスを掛け、黒いコートに身を包んだ物騒な男が目飛び込んでくる。何やら白いメモ用紙を凝視して、歩いてくるところだった。思わず息を呑んで道を譲る。

「どうもお」

見かけとは裏腹に、軽そうな声が返ってきた。身構えていたが、拍子抜けする。

茶髪の少女は、自分の家に向かって歩を進めた。

m a l e

「仕事を取つてきな！ でなきゃ今夜は外で過ごせ！」
人が何かで殴られたかのような鈍い音が響いてきて、思わず身がすくんだ。

部活の仲間達と遊んで、いつもとは違うルートで家に向かっていたところ、壮絶な場面に出くわしてしまった。

外に誰かが投げ出され、雪の中に埋もれる。家の玄関戸が、ピシヤリと鋭い音を立てて閉ざされた。さっきまでの怒声は女性のものであった。その人は相当激昂している。酒でも回っているかのような勢いだ。

成す術も無く、少年は一部始終を聞いていた。そして、投げ出された人物が誰なのかも知っていた。

全て明かされた、彼女の事情。

恐る恐る物陰から様子を窺う。やはり、同じクラスのヤンキーだった。星明かりの中、身を起こした彼女の頬が淡く煌めく。

薄い部屋着しか身につけていなかったのが可哀想でならない。鋭い冷気が、身も心も彼女を痛めつけていた。

見過ごすことができるわけもない。

「なあ」

おずおずと彼女の元へと歩き出す。ビクツと身を震わせて、その不良少女はこちらを見た。硬い雪で唇を切ったのか、血が流れている。

「どうすんだ、お前。あえて言うけど、全部聞いちゃったぞ」

少女は視線を落とし、少年の問いに黙ったまま答えない。ただ、寒さに身体を小刻みに揺らしていた。

訊くのは酷だったか、と考え直す。傷心しきった人間には癒すものが要る。

自分のコートを脱ぎ、彼女にそっと被せた。

「ウチに来いよ。飯、まだ食ってないんだろ？」

茶髪の少女は小さく頷く。普段と比べて、すっかりおとなしかった。

「ありがとう」

涙声で、囁くように彼女が言う。相当疲労しているのか、立つのもやっとという様子だ。

少年は彼女に肩を貸し、慰めながら自分の家へ歩き出した。

星は優しく二人の歩く夜道を照らす。雪を踏み鳴らす小気味の良い二つの音は、ゆったりとリズムミカルに時を刻んだ。

「実は昨日の夜、お前の家がどこにあるかサングラス掛けた男に訊かれたんだけど……分らないって言つといた。何か心当たりあるか？」

少年が恐る恐る訊ねてきた。ひよつとして、あの物騒なヤクザっぽい男のことだろうか。

「ううん。そんなような人は確かにいた。家も借金はしてないはずだし……道に迷った不審者かな」

朝日が家々の間を縫って光を投げかけていた。だが、気温は相変わらず低い。零度を下回っている。

結局、昨晩はこの男子の家に泊めてもらった。傷の手当てをして、温かいシチューを食べた。熱い風呂にゆったり浸かった。ふかふかのベッドで寝させてもらった。これほどくつろいで過ごせたのは、一年余なかつたことだ。

今は雪の芸術を見るために、公園へ向かっている。土曜ということもあり、急ぐ用事もなかった。

道角を曲がったところで、思わずびくついた悲鳴を洩らしてしまう。目の前に、ボサボサの灰色の髪を生やしたホームレスがいたのだ。昨晩見た人物と、全く同じ人間だ。

そのホームレスは爽やかな笑みを浮かべて、二人の若者に会釈する。

「若者よ、ユメはあるか？」

それだけ言つて男は去つていく。薄汚い格好の割に、さっぱりした表情の男だった。不思議と好感が持てる印象だ。

背後を振り返つてそのホームレスの姿を確認する。シャベルを右手に、彫刻するための道具が入ったバケツを左手に持っていた。気のせいか、男の服も道具も、水に濡れている。

「まさか」

隣にいた少年が公園へ走り出した。仰天したような表情を浮かべている。

「ちよ、ちよっと！」

慌てて後を追った。

少年が思ったことは、自分が考えていることと同じだろうと予想はついている。

目の前に広がるのは、夢のような世界だった。

白銀の夢の世界。

公園の門の両脇には、一メートルほどの高さがある雪だるまが三体ずつ配置され、木でできた剣を右手に、左手に盾を持って佇んでいる。

門を抜けたその先には、透明な氷を削って造られた人物像が、滑り台の上で待ち構えていた。左手を後ろに回し、右腕は朝日の昇っている地平線へ向けて真っ直ぐに伸びている。背広はまるで風になびいて波打っているようだ。目はその朝日の光を真っ向に受け、生きていく人間よりも活気に満ちた煌めきを見せている。

その男性像の足元には、砕けた木の板に流れるような黒い筆記体で言葉が書かれていた。

「The young be ambitious」

「若者よ、大志を抱け」隣の少年が、興奮した様子でそれを訳す。

「クラーク像を模したんだ」

公園の中には、ミニチュアの雪の街が広がっていた。

白い高層ビルが建ち並び、鉄骨組みの電波塔が誇り高く天を衝く。道路が網目のように敷かれ、雪の車がその上を走る。

山間部には農家の古い家や畑が、細やかに彫り込まれていた。

よく見てみると、建物の芯にペットボトルを初めとするゴミが使われているのが分かった。電波塔は金網に雪をこすり付けて、まる

で本物のように設計されている。

やはり、あのホームレスこそがこのアートの作製者のようだ。まさかとは思っていたが、ゴミ漁りをしていた浮浪者の話題はこれで辻褄が合う。少年もやはり予想が当たったらしい。目が合うと頷いてみせた。

観客が何人かやって来て、感嘆の声を上げている。まさに、夢の中に放り込まれた気分だった。

「おい、クラーク像の下に、何かたくさん吊り下がってるぞ」
少年がその場所を指し示す。何やら、色とりどりの長細い紙が、張られた糸にくっつけられているようだった。

雪の街を迂回して、少年と少女はそこに駆けつける。

古い金属の机があり、その上に何色もの長細い紙が入った箱と、黒いボールペンが数本立てられたペン立てが置かれている。そして、味のある字でメモが残されていた。

新年を迎えて思ったことを書き、結びつけましょう。

「なるほど、じゃあこれは先に来て書いていった人達のものか」

彼が参考までに、と見物し始める。すでに三十枚ほどの紙が、吊られて風になびいていた。その時、背後で驚きの声がかかる。

「これ、俺達のクラス担任のだ」

少年が一枚の紙を凝視していた。

「本当？」

興味が湧いて、一緒に覗き込む。読み間違いようのないクラスの担任の名前が記された、紫色の紙がそこに結ばれていた。

不良と呼ばれる男女。彼らの視点に立ち、彼らの気持ちを考え、彼らを見守っていききたい

柳田 悟

夜、星が瞬いている。今頃、公園ではアーティストがせつせと雪を加工しているのだろう。寒い中、よくそんな繊細な作業を進められるものだとは毎年感心している。

担任は一口温かい牛乳を飲んだ。身体の奥が暖められる。

外を眺めていると、携帯電話のメールの着信を報せるメロディが自室に響いた。携帯電話を開く。待っていた人物から、やっと返信が来た。

飼育係の係長だ。

「あっ、おっさんのじゃんこれ」

思わず、少女が仲間内でのあだ名で叫ぶ。

「おっさん？」

「ほら、飼育係のボランティアの」

「飼育係って……」

「ニット帽の」

そこまで言って、彼は納得したように頷く。

「幸村さんが」

よく見ると、同じ紙にもう一人別の人物が言葉を書いていた。二人の言葉を見て、思わず彼らは同じ感想を洩らす。

「何、これ」

動物はヒトの嘘や悪事を見抜く力がある

幸村 ゆきむら 剣人 けんと

気圧の対義語ってのは金だ。空気がいっぱいあるところから、空気の少ないところへ風は吹く。でも金は違う。豊かな奴にほど金は集まってくるし、貧乏な奴に限って金は集まらない。理不尽に思えても、これは常識

真田 さなだ 寛矢 ひろや

「何か分かったか、彼女について」

幸村は受話器に向かって問いかける。真田に頼んで例の茶髪の少女について調べてもらっていた。元はと言えば、柳田先生から相談を受けたのがきっかけだ。これもボランティアの一種だ。

電話の向こうから、菓子をポリポリと食う音が聞こえてくる。

「おい、ちゃんと調べたんだろっな？」

「ああ、役所に行ってきた。母子家庭らしい」

「他に分かったことはないか？」

「生活保護を受けてる。家の月収は低そうだ。その女の子は、派手な格好してて実は貧乏ってパターンだな」

真田が淡々と事を述べていく。彼女の家の実態が何となく掴めてきていた。

クラス担任の話によると、授業はサボるか寝ているか保健室に行くかの三択らしい。出席帳でその割合を確かめると、ただ単にサボるより、寝ているか保健室にいる割合が高い。

遊びたいならサボればいい。しかし、寝ることと保健室へ行くことの意味がいまいち分からない。何かしらの理由で授業を休息に充てていると考えるのが妥当だ。保健室の利用回数からして、仮病を使っているのは容易に想像できる。

さらに、ホーム費などの滞納。これが決定打となった。

「彼女は家計のために秘密裏にバイトか何かやってるはずだ。それ

も、相当体に負担が掛かって給料が少しでも高いやつだ」

「あと、中学生を雇ってくれそうな仕事だろ」

菓子を頬張りながら真田が付け足す。真面目にやっていないようで、きちんとやるのがこの男だ。腹は立つが、憎めない。

「新聞配達とか運送会社の荷物運びか」

真田が早速可能性のある仕事を挙げる。

「そうだな。接客業は年齢的に見て不可能だから、力仕事か簡単な事務だろうが……」

「授業ちゃんと受けてないんだろ？ 事務は無理だな。もともと、数字を扱う類は苦手なんだろう」

となると、やはり体力を消費する仕事しかない。女子中学生の華奢な身体にとって、一番向いていない。そして、負担が大きい。このままでは、今に身体を壊すだろう。

「何なら俺達のビジネスでも手伝わせるか？ 大した労働力も要らねえし」

真田が電話の向こうで卑しい笑みを浮かべているのが容易く想像できる。

「あのなあ、確かに儲けはでかい。でも……」

「冗談だよ。しかし、あんなに貧乏じゃあ万引きくらいは経験してるだろうな、彼女」

「おい、声がでけえぞ。周りで誰も聞いてないんだろうな？」

「大丈夫だ。車の中から電話してる」

「嘘つくんじゃないぞ。本当なんだろうな？」

まさか、カフェでこんな電話をしてるんじゃないかならうかと心配になる。大抵、そういう心配は杞憂で終わるのだが。その辺は真田はぬかりない……はずだ。

「ところでさ、お前ってすぐに動かせる金いくらある？」

真田が唐突に問いかけてきた。この話の運び方は、真田が名案を思いついた時に用いる話法だ。

「何かアイディアでも浮かんだのか？」

「まあな」

満更でもなさそうに真田が答える。

「で、内容は？」

「この街に足りないものだ。観光業でもなく、娯楽施設でもなく、漁業や農業でもない。工業や情報産業でもない」

「何だよ、早く説明しろって」

「この街は疲れてる。即ち、癒しが無いんだ」

「意味分かんねえよ」

少年と少女は、しばらく他の人の紙を見物していた。その中に、少女の人生を揺るがした言葉が見つかるなど、誰が予想できただろうか。

何十枚と取り付けられた紙の一枚。ふと少女が目を留めた赤色の紙。堂々とした筆書きの達筆が紙に溢れていた。

ユメを見て何が悪い。家族もいない。友人もいない。家も無い。服も、食べ物も、金も、プライドすらない。そんな人間でも、ユメを見て何が悪い。何も無くたって、ユメしかなくたってアーティストであることに変わりはないんだ

らいと

それを目にした時、雷に撃たれたかのような衝撃が、思考を麻痺させた。

それは誰が書いたものであるか、問わずとも知れたことだった。

たった一度言葉を掛けられただけ、そんなすれ違いの関係。でも、あのみすばらしい格好で澁刺としていられる男以外に誰がこんな台詞を書くだろうか。思いつかない。

ユメを見て何が悪い。

頭の中で、その言葉が何度も何度も行き交う。

「これ……いいな」

少年が別の紙を眺めて、言った。その紙は他のものとは違い、普通の白い大きめの紙だ。

少女はゆっくりと少年の視線を辿り、白い紙を見る。感動覚めやらぬ彼女が、そこに目にしたもの。瞳が見開かれる。

わたしは、おとなになったら「かんごし」さんになりたいです

にいじま ゆき

新島優姫。

自分の名前だった。

「これ、お前と名前一緒な子じゃん。破いてぐしゃぐしゃになったのをテープで繋げてあるけどよ。こういう純粋なユメ持つてる奴、いいよな」

何も知らないその少年は、思ったことをそのまま口にする。

それは間違いなく、昨日少女が破り捨てたものだ。あのホームレスの男がゴミを漁るうちにこれを見つけ、テープで繋げてここに吊ったに違いなかった。

看護師。

そんなくだらない幻想、抱いてはいけないと思った。現実はある。将来のユメなど気にもかけられない、貧しい家庭。看護師になりたいというユメなんて、とても叶えられそうにないものだ。

でも、諦めてはいけない気がする。叶えられそうにないユメだっ

たとしても、もし叶えられるのならどんな努力だって惜しまない。どれだけ惨めでひどい生活を送ったとしても、ユメがあるのと無いのでは全く違う。

ユメがあるから、日々生きているということに意味を見出させるのだと気づいた。

だから、さつき会ったホームレスは爽やかだったのだ。社会の隅に追いやられても、あんなに澆刺はっせいとしていられるのだ。

少女は立ったまま、その紙を凝視していた。

「俺も紙に書くわ」少年は机に歩み寄りながら、茶髪の少女の背に声をかける。「何か書かないのか？」

「えっ、私？」

少女はゆっくりと少年のいる方へ振り向く。

太陽の光が屋根を超えてクラーク像を照らし出した。

少年に向かって振り向いた彼女は、笑っていた。

「いいよ。もう書いてあるから」

t e a c h e r

窓に付いた露が、街の光をぼかして見せていた。幻想的な夜景がガラスの向こうに広がっている。

飼育係長から送られてきたメールに目を通す。何やら、件の茶髪の少女を救済する方法を見つけたと書いてあった。具体的な内容までは書いていないため、何の話かさっぱり分からない。

ただ、「任せとけ」という最後の一言には不思議な説得力がある。ニット帽をかぶり直して、うさぎ小屋の掃除に励む飼育係長が脳裏

に浮かんだ。

明日、土曜の朝早くに公園に立ち寄ることにする。アーティストが懸命に創作した芸術は、一体どんなものに仕上がっているのだろうか。期待に胸が踊る。

週末明けの月曜の朝。学校の門をくぐると、何やら騒がしい声が校舎裏から聞こえてきた。朝っぱらから一体何をやっているというのだろうか。様子を見るために、校舎裏へ立ち寄ることにする。

雪は依然として融けず、未だに辺りは一面真っ白の粉を被ったままだ。

校舎裏にやって来て、まず目についたのはニット帽を被った男だ。そして、その人物を取り囲むようにたむろしている不良達。

「よう、先生」

こちらに気づいたニット帽の男が、笑顔を浮かべて気さくに手を振った。飼育係長だ。

「先生、見てみてよ。この子可愛いよ」

不良の少女が興奮気味に手招きする。黒い長髪にパーマをかけた女子だ。寒さで頬を赤く染めている。

「どうした？」

騒ぎの正体を暴くため、飼育係長を取り巻いている中学生達を掻き分け、係長が腕に抱えている段ボール箱を覗き込んだ。

「これは……」

箱の中には、掌に収まるほどの小さな白うさぎが三匹。暖かそうな毛布に潜ったり、身体を寄せ合ったりと寒そうに身を震わせている。愛くるしいその一挙手一投足に、周りの生徒達が悩ましげに歓声を上げた。確かに、可愛らしい子うさぎだ。

「今朝学校の飼育小屋を見に来たら、その屋根の下にこの段ボール箱が置いてあったんだ」

飼育係長は目を細めて言った。そして、パーマの少女に優しく箱を渡す。

「お前ら、このメッセージ読まないのか？ 面白いこと書いてあんなに」

係長は段ボール箱の側面に貼つてある紙を示した。何やら達筆の黒文字で、不思議な言葉が残されている。

若人よ、大志を抱け。お前達が届かない所にそれがあっても、跳ねれば届くこともある。空を見る、若者よ。あの巨人のオリオンが見えるか。跳べ、若者よ。あいつを超えて見せる。

「若者よ、大志を抱け…… The young, be ambitious」

見覚えのある言葉だ。

「これのこと？ なんかダサイもん」
別の女子が変な目でその紙を見る。“痛い”人間を見る時にするような視線だ。

「お前ら、公園にある氷のクラーク像見に行つてないのか？ 若者よ、大志を抱けて言ってるぜ」

係長が紙を剥がして懐に仕舞いながら、意外そうに訊ねた。ふと一昨日の早朝に訪れた、公園の雪の世界を思い出す。あれは壮観だった。

段ボールに貼つてあつた紙からして、ひよつとしたら、うさぎの飼い主はアーティストだったのかもしれない。そうでないなら、誰かが捨てたうさぎをアーティストが学校を頼みにして持ってきたのだらう。

「じゃあ、俺がいなくなつても、こいつらの世話を頼んだぞ」

係長はそう言葉を残してニット帽を被り直し、踵かかとを返す。唐突だったので、一瞬脳の理解が遅れた。

「おっさん行っちゃうのか……残念だ」

「バイバイ。また会ったらよろしくね」

不良達は名残惜しそうに手を振っている。係長は振り向かず右手を軽く挙げて応えた。その後ろ姿は、校舎の角を曲がって見えなくなる。

「ちよつと待て、幸村さんってこの学校の飼育係、今日で辞めるのか？」

隣でうさぎ達を優しく撫でているパーマの女子に、訳も分からず訊ねた。少女は微笑んで頷く。

「街の空いてる物件で新しく店ができるから、そこに勤めるんだってさ」

寝耳に水だ。何の前触れも無かった。

呆然と係長が消えていった校舎の角を見つめる。そう言えば、係長がこの学校にやって来たのも突然のことだった。神出鬼没だと彼が自分で言っていたのを思い出す。まさしくその通りだ。

「そう言えば先生ってユツキーの担任だよな？」

パーマの少女が、不意に訊ねてきた。そうだ、と返事をする。ユツキーとは、例の茶髪のヤンキー、新島優姫のあだ名だ。

「一時間くらい前から職員室の前で待ってるよ。ユツキーが」

「え？」

思わず耳を疑う。

「先生に呼び出しされた、とか言ってたけど」

意外だった。確かに、先週の金曜の朝、今日話の続きを言うと云った覚えはある。しかし、いつもならすっぱかしているはずだ。来るとは期待していなかった分、度肝を抜かれた。

「珍しいね。呼び出しされたら大抵サボるか強制的に連れてかれてたのに」

「……分かった」

パーマの少女に軽く礼を言い、慌てて職員玄関へ向かう。凍った地面に足を滑らせそうになった。

「任せとけ」

ニット帽の男の後ろ姿が瞼の裏に浮かぶ。

bad guys

生徒達や柳田先生と別れ、校舎の近くに停まっていた黒い乗用車の助手席に乗り込む。

「用は済んだみたいだな。あと五十万ほど要るぞ、計算上」

運転席の真田がそう言っつて紙を渡してきた。相も変わらずサングラスをかけている。

「二軒回るか、一発でかいのやつてのけるか、どうする?」

紙を確認した後、相棒に訊ねた。大体の資金は揃っている。ただ、やはり急に大金を動かすには少々懐が寒い。

「金持ちが隣街に住んでる。正月の里帰りであと三日は帰らない。

その間、家には誰もいない」

真田が黒い革張りの手帳を見て、そう答えた。

「俺も候補があるぞ。例の新島優姫ちゃんをクビにした会社の社長だ。調べたら、クビの理由が『社長が優姫ちゃんに身体を求めたら彼女が拒んだ』って話だ。今夜、社長は週初め定例のミーティングがあつて、帰りは夜遅い。九時から十一時までが狙い目だ。家の周辺は車があまり通らないから、歩いて行った方が怪しまれない」

相棒が黙つてサングラスを取る。

目が合った。

「決まりだな」

「そう来ねえと」

お互い右拳を打ち付け合う。悪戯っぽい笑みがこぼれ出た。

「ところで、俺が寒い夜を散々迷い歩きながら届けた手紙には何て書いてあったんだ？」

真田がアクセルを踏んで車を発進させつつ訊いてくる。

金曜日の夜のことだ。そう言えば、真田が滑って転ぶわ、少年に道を訊ねても訝しげな目を向けられて拒まれるわと、じとじと愚痴を吐いていたのが記憶にある。

「まあ、別に対したことは書いてない。一応下書きなら……ほらポケットに入っていた手紙の下書きを真田の膝に置く。

「どうやって読めつつうんだよ。運転してるだろ」

「まあ頑張れ」

「車スリップさせて助手席だけ電柱にぶつけてやろうか？」

「後で読めって」

そう言っつて、座席を倒した。夜の“仕事”に備えて寝不足を補うのだ。

車窓から空を見上げると、雪が降り始めている。あの白い子うさぎの毛のように、ふわふわとした柔らかい粉雪だ。

それを見ていて、ふと思いつく。

そう言えば、今年はずさぎ年だ。

飼育係長の手紙

“新事業開設の援助”

後れ馳せながら、明けましておめでとうございます。

雪が降り積もり、街一面が凍り漬けで寒い日々が続いています。

さて、唐突にこのような手紙を差し出しまして誠に失礼致します。先日、友人より新島様のご家庭の事情を小耳に挟みました。そこで私達田村組は「ペットショップ」の経営を提案させて頂きます。

この街は観光業が主体で、他の分野での会社もそこそこ進展を見せています。しかし、ペットショップだけはありません。周辺の街を見回しても、存在しません。よって、新たに店を建てればかなりの集客・売上を期待できると思われれます。

大体の計画を説明致します。

- ・ 出資は弊社が行い、経営は新島様にお任せする
- ・ 経営なさる上で、開店より一年前後、補佐として弊社の経理である真田寛矢、飼育員の幸村剣人を派遣させて頂く
- ・ 毎月、売上の十パーセントを指定の口座にお納めして頂く。資本分の金額が回収でき次第、毎月の納付金の減額などを通知させて頂く
- ・ その他の様々な問題は弊社の方で適切な処置をさせて頂く

以上のようになっております。夢のような話かもしれませんが、友人への借りを返すものとしてこの事業をやらせて頂いています。決して詐欺などではございません。

お返事は以下の携帯電話にてお聞かせ願います。この土日の昼十二時前後にお掛け頂ければ仮契約成立と致します。期限を過ぎた場合、下記の番号は無効となり、電話が通じなくなるのでご注意ください。

090 - XXXXX - XXXXX

お返事お待ちしております。

田村組

数ヶ月後

「なあ幸村、今さらなんだけどよ、謎が解けたぞ」

「サクセス」という銘柄の雑誌を眺めていた真田が、ページの陰から目を覗かせる。

「なぜ？ 先輩なぞなぞか何か解いてたんすか？」

バイトで職場に来ている茶髪の少年が、真田の雑誌を奪おうと手を伸ばす。真田はひょいとそれをかわした。

「落ち着けて一志」

苦笑いしながら、真田がポケットをまさぐる。出てきたのは黒い手帳だ。ずつとそれに挟んであったのか、折り目がくつきりついていた例の紙が机の上に広げられる。

若人よ、大志を抱け。お前達が届かない所にそれがあっても、跳ねれば届くこともある。空を見る、若者よ。あの巨人のオリオンが見えるか。跳べ、若者よ。あいつを超えて見せろ。

「何すかこれ？」

一志と呼ばれた少年が、眉をひそめて紙を見る。

「さあ問題。今年は干支の何年だ？」

真田の得意気な顔を見て、げんなりした気分になる。なぞなぞを

自分以外の人間が解けなかったら、いつもこのイラがくる表情で語り出すのだ。

「うさぎだ。そんなもん誰だって知ってるだろ」

真田の得意顔を視界に入れないように答える。

「幸村さん、何か不機嫌じゃないっすか？」

少年の質問を、蛇睨みで返した。身の危険を察知したのか、少年はそそくさと離れる。

「この紙を手に入れたのは冬の一月だ。冬の星座と言えばオリオン座だろ？」

これ見てみるよ。真田がそう言って雑誌を手渡してきた。夜空の特集で、冬の星座が描かれた星空が写っている。

星座の上には、分かりやすいように細い線で絵が描かれていた。

おおぐま座は熊の形に。オリオン座は、棍棒を振り上げた巨人の姿に。様々な生物や物体が黒い背景の上に浮かび上がっていた。

「跳ねて、跳んで、オリオンを超えるんだ」

真田が呟くのが聞こえてくる。なるほど、と思わず唸った。

オリオンの足元に、それは静かに佇んでいる。

「へえ」茶髪の少年が納得した表情を作った。「こんな星座があるもんなんすね」

彼が指でその絵をなぞる。

「Lepus……か」

完

(後書き)

Leppus...フリン語の、ハナウ、ハナウ、ハナウ座

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2563q/>

オリオンの足元に

2011年1月26日10時05分発行